

調和体の表現

歳 森 芳 樹
TOSHIMORI Yoshiki

書の分野には漢字・仮名・調和体の三分野があります。その中で調和体は一番新しい分野です。新しいだけにその向かうべき方向には様々な可能性を探る事ができます。漢字・仮名にはその基礎となる古典があります。その古典から様々な表現を吸収し、新しい表現・自分自身が発信する表現の基となるものを作り上げ多様な表現を生み出してきました。一方で調和体はまだ古典と呼ばれるものはありません。日本の書は日本語を書くために生まれたものです。その時代の言葉をその時代の書き方で表現したもので、大きく分類するとしたら、その時代の調和体とも言えます。同様に考えると現代の調和体は、現代使われている言葉を使って表現するものともいえます。その表現の基とするものを何に据えるかは、大きく二つの方向性に分けることができます。その一つは漢字・仮名の古典を表現の基とするもの。もう一つは言葉の持つイメージを表現の基とするものです。

今回は漢字の古典を基にしてそれに合うよう仮名も表現し、普段書きの何気ない書きぶりをしていこうと取り組みました。撰文は日

ごろ親しんでいる俳句から漢字が主となるものになりました。一行書きの形で表現するため半切を用い、漢字と仮名は字画の多少による自然な文字の大小としました。

普段使用する筆記具を用いて書くような自然な流れが出るように心がけましたが、いざ筆を手にとるとどうしても表現に傾いてしまいました。成瀬映山先生が日頃から仰っておられた「調和体はノートや手紙に書くように普段使いの書で書くことが一番むつかしい事だ。」を痛感し、まだまだ自身の基礎となる物の不足を補うための古典臨書の大切さに気付かされた作となりました。

・ 釈文 月の夜の海なき國を柳絮とぶ

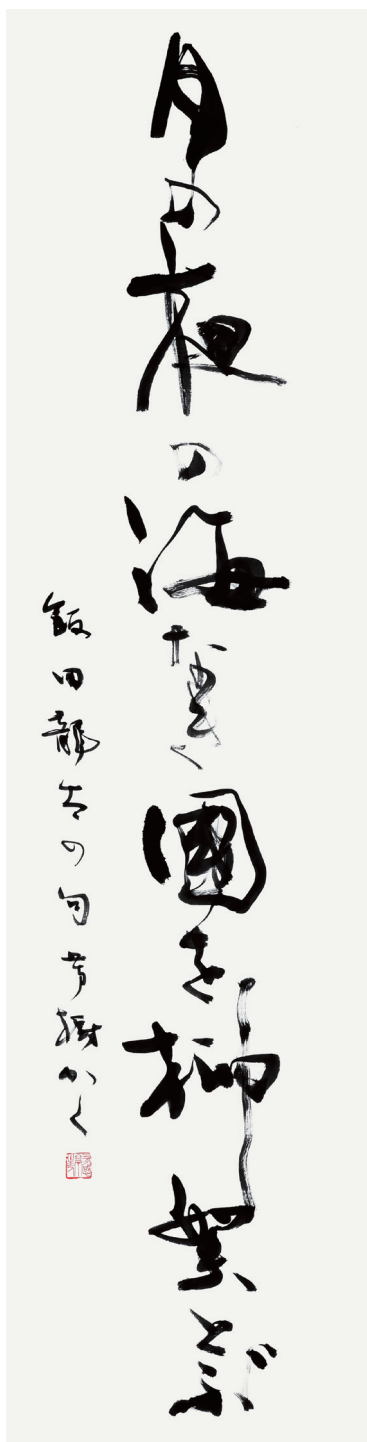
・ 用具用材 筆：杉影（兼毫筆）

紙：南華箋（台湾画仙）

墨：杉影（和墨）

・ 寸法

135 cm × 35 cm



月の夜の海なき國を柳絮とぶ

135cm × 35cm